団地タクシーは視界の広い前席に2人の乗客が座ることが可能。走りながらこぎ手と会話を楽しんだり、道行く知り合いに声を掛けたりすることができる

館ヶ丘団地は、自然に恵まれた住環境を誇るが、起伏のある広い敷地内の移動は、高齢者にとって難題だ

小回りが利く団地タクシーは、団地内の狭い通路もスムーズに走れる（右）。敷地内にはかなりのアップダウンがあるので外出をためらう高齢者もいるが、団地タクシーなら行きも帰りも楽々（左）

東京・八王子市の高尾山は、都心からのアクセスが良く、年間約250万人もの登山客が訪れる。ミシュランが作成した日本観光ガイドでも、世界遺産の富士山と並び、2007年から連続して三つ星を獲得し、多くの外国人も登山を楽しんでいる。

高尾山から東へ約1・5㎞、JR中央線高尾駅からバスで約10分の場所にある館ヶ丘団地は、自然に包まれた生活環境を誇る。総戸数は2847戸で敷地面積は東京ドーム約6個分の29ha。豊かな木々や起伏に富んだ地形がさまざまな表情を作り出し、自然公園の中にいるような雰囲気だ。

2013年5月から、そんな団地の小道を、かわいらしい箱形の乗り物が走り抜ける姿が頻繁に見られるようになった。前部の座席に乗る高齢者とすれ違う住民が、「こんにちは、お元気ですか！」と明るくあいさつを交わしている。

かわいらしい乗り物の正体は、3輪自転車を使った「団地タクシー」。団地内の移動に苦労する高齢者のために自治会が運営している。自宅と団地入り口のバス停や団地内の商店街などへの往復に、一日20人くらいが利用している。

その様子をじっくり見るとびっくりすることが。大きな車体の後部でペダルを颯爽（さっそう）とこいでいるのも高齢者だ。かなりの上り坂でも、にこやかに運転している。

こぎ手の苗村昭子（なえむらあきこ）さんは72歳。「運転者のボランティア募集の告知を見たのがきっかけ。困っている高齢者は元気な高齢者が支えないと。地域との関わりを持てば自分の張り合いにもなりますから。運動のつもりでやっています。電動アシスト付きなので、見た目よりずっと楽ですよ」と話す。

前の座席の利用者は78歳。ほぼ毎日、利用している。「団地内のスーパーで買い物をした後、荷物を持って帰り道の坂を上るのがつらくて。団地タクシーのおかげでとても楽になりました」

団地にピッタリの乗り物

「館ヶ丘団地では住民の高齢化が進み、現時点で65歳以上の住民が約43％を占めています。そうした高齢者が、毎日の買い物に困っていたり、引きこもりになってい

団地の敷地をゆっくりと走る団地タクシー。車体は大きいが電動アシスト付きなので、高齢者でも会話しながら運転できる

CASE 1

館ヶ丘団地（たてがおか）
（東京・八王子市）

老いも若きも運転手に

団地タクシーが運ぶ高齢者の笑顔

東京・八王子市の館ヶ丘（たてがおか）団地に2013年5月、3人乗りの自転車で高齢者を送迎する「団地タクシー」が走り始めた。外出に苦労する高齢者のために自治会で運営している。団地に住む元気な高齢者と、地域の若者がボランティアとしてこぎ手を務める。団地タクシーが走り回ることで、地域に笑顔が生まれ、支え合いの絆が強くなっている。

写真＝田中 昌
取材・文＝横田直子

乗客と会話を交わしながら、団地タクシーを運転する今泉さん。高齢者の生活状況の把握にも生かしている

自治会副会長
西田田鶴子さん

「八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘」室長
今泉靖徳さん

自治会事務局長
柿崎泰秀さん

法政大学多摩キャンパスに通う
松本詩織さん

団地タクシーの運行範囲は団地の敷地内。入り口付近にある整骨院への通院（上）やスーパーマーケットへの買い物（下）などさまざまな用途に使われている

たりするケースが増えています。なんとか自主的に外に出てもらう方法はないか、自治会で常に話し合っていました」と自治会副会長の西田田鶴子（にしだたづこ）さんは振り返る。

しかし、広く起伏に富んだ館ヶ丘団地は、高齢者にとっては敷地内を歩くのさえ大変なことがある。そんな問題意識を共有して解決に力を尽くしたのが、団地で東京都の見守り事業を進める「八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘」室長の今泉靖徳（いまいずみやすのり）さんだ。

今泉さんが目を付けたのは「ベロタクシー」。「ベロタクシー」とは、ドイツで実用化された自転車を利用したタクシーのこと。「自動車通行を制限した団地内にピッタリだと思いました」。このアイデアを受けて、東京都の補助金を利用して自治会で導入することを決めた。

「ベロタクシー」は高齢者用に設計されているわけではないので、より使いやすいオリジナル車両を自転車メーカーに発注した。そうして出来上がったのが乗り降りしやすく、前方視界が広い電動アシスト付き3輪車の「団地タクシー」だ。現在、月曜から金曜までの週5日、10時から15時まで、2台を使い無料で運行している。走行範囲は団地敷地内なので、1往復は10～20分だ。

こぎ手はボランティアで、70歳代もいる。「老々介護みたいなものかもしれませんけど、みんなけっこう楽しくやっています」と話す自治会事務局長の柿崎泰秀（かきざきやすひで）さん（70）も、自らペダルをこいでいる。

若い力のサポートも

こうした高齢のこぎ手をサポートする助っ人が、近隣にある大学の学生たち。その一人、法政大学に通う松本詩織（まつもとしおり）さんはこぎ手を始めて3カ月になる。「キャンパスにあるボランティアセンターでこぎ手の募集を知りました。面白そうなボランティアだと思って応募しました」

当初は高齢者とのコミュニケーションに不安もあったという松本さん。しかし、団地タクシーは乗客とこぎ手だけの個室のようなもの。自然と乗客との距離は縮まっていった。

「ガムやアメをいただくのはしょっちゅうですし、『松本さん、お願いね』と指名してくれる常連さんもできました」。利用者にとって松本さんは孫世代。「私も団地におじいちゃんやおばあちゃんがたくさんできたように感じて、楽しくこいでいます」。

団地タクシーは高齢者の足代わりになるだけでなく、見守りにも力を発揮している。利用に当たっては、同意を得た上で名前や年齢などの情報を登録してもらい、乗客の情報収集に活用。

また、毎週決まった曜日に利用する乗客に「いつもどこに行くんですか？」と尋ねると、「整骨院ですよ」という答え。この会話だけで生活状況が把握できる。

さらに車内で「ほかに調子が悪いところは？」「何か不便なことは？」といった会話を交わして、見守り活動を充実させている。

「団地タクシーの利用をきっかけに、これまで自治会や相談室と交流がなかった高齢者が、健康面や生活面の悩みについて相談を持ち掛けてくれるようになりました」（今泉さん）。そうした結果、「以前はある程度の頻度で発生していた高齢者の孤独死も、団地タクシーの導入後は、ほぼなくなっています」（西田副会長）。

地域の住民で支え合う

さらに導入の効果について、西田副会長は、「今まで足元だけを見て歩いていた高齢者が、団地タクシーの気配に顔を上げて、乗客やこぎ手の高齢者とあいさつを交わすようになりました」と話す。

移動の苦労が軽減した乗客の高齢者には、周囲を眺め、知り合いとあいさつし、会話する余裕が生まれた。そして、こぎ手の若者と触れ合い、元気を分け合っている。また、こぎ手の高齢者は、人の役に立つ喜びによって生きがいが持てるようになった。

今泉さんは、「団地タクシーは、団地全体で高齢者サポートを強化していることのシンボル的な存在です。団地タクシーを通して、地域のみんなで支え合って暮らしていく大切さに住民が気付いてきたと思います」と話した。

「八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘」の前が団地タクシーの拠点。登録者からの要請を受けて、ここから出発する（上）。団地タクシーは前2輪、後ろ1輪の3輪車で、荷物置きも備えている（右下）。運転方法は基本的に自転車と同じ、変速機も備えている（左下）

電動アシスト用のバッテリーの充電は団地入り口のバス待合所の屋上に設置された太陽光発電パネルの電力で行う（上の2枚の写真）。こぎ手のサドルの下にあるバッテリーを外して充電しておく（下の2枚の写真）